



戦いを終えて(第40回全日本女子学生剣道優勝大会にて)

# 剣道部学長杯！！

**現状を引き受けて**

「楽しみながら次につながるような思いで、一戦一戦大切に試合に挑んだ。」こう語ってくれたのは昨年度の剣道部を牽引した剣道部女子前主将の黒木美宇さん(教育協働学科スポーツ科学専攻4回生)。昨年度は目標とする大会もななく、大学での大きな大会に出場したこともない下回生部員を多く抱える中で、今年度は若いチームで大会に臨んだ。



躍進する女子剣道部(大阪教育大学剣道場にて)

第40回全日本女子学生剣道優勝大会女子ベスト8、そして敢闘賞受賞。コロナ禍にあっても不常に前進する剣道部が今年度、大教体育会の最優秀活動団体に送られる「学長杯」団体の部を受賞した。その躍進の秘訣には、「コロナ対策ゆえ男女別の活動を余儀なくされた女性部員たちによる工夫と努力があった。そこで今回は新旧の女子主将にその活動の実際、そして剣道に向けた思いを伺った。

**団結のスローガンとは**

今年度の剣道部が掲げたスローガンは「戮力協心(りくりりよくきょうしん)。「全員の力を結集し、一致協力して任務に当たること」との意味だが、コロナ禍で思うように活動できない現状を直視し、z.o.o.mを利用して選手の間を配信することやオンラインでのミーティングを頻繁に行うなど、部としてモチベーションを保ってきた。「元々は男女一緒に稽古してきたが、コロナ禍で男女が一緒に稽古できなくなってきた。男子の高い水準レベルで稽古を一緒に行ってきたが女子だけの活動体制となり、稽古の水準を下げないよう全員で現状に満足することなく取り組んできた。」と黒木前主将は力強く語ってくれた。大会が開催されることを信じて一回一回の稽古を大切に、量より質の稽古を心掛けてきた。「稽古中は礼儀などの面で上下関係はしっかりとしているが、プライベートでは回生関係なく、仲良くコミュニケーションを取っている。」剣道部女子における規律と良好な学年関係についても黒木前主将は

語ってくれた。

**団結力の秘訣とは**

「大会当日は部員が試合を観戦できるようにパブリックビューイングを行って全員で応援し、試合後にはz.o.o.mで顔を合わせながら一人ひとりの存在の大きさを実感することができた。」語ってくれたのは、今年度剣道部女子主将を務める山田彩結さん(教育協働学科スポーツ科学専攻3回生)。「全員で勝ち取った結果がこのようになり、受賞できることになり、とても誇りに思います。今回の受賞が私たちにとってさらなるモチベーションとなり、剣士としての自覚を高めました。現状に満足するのではなく、自信と自覚をもって部員一同さらに精進していきたいと思えます。」と山田主将は学長杯受賞の喜びを語る。

今年度以上にスローガン通りの「戮力協心」を体現し、全国の舞台でベスト8として敢闘賞を受賞した剣道部。来年度は「同志魂(ともちぢま)・鍛え・伝える」という新たなスローガンのもと、さらなる飛躍を目指す。

**関西1部リーグへの昇格を果たして**

昨年度は1部リーグへの昇格を果たすことができなかった悔しさをバネに、今年度は「関西2部リーグ全勝優勝・1部リーグ昇格」と、語った。

輝かしい結果を収めた加藤さんだが、苦悩の時期もあった。そんな時はNBAのハイライト動画やBリーグの試合を視聴したり、様々な指導者のもとへ足を運んだり、「自ら行動」を起こして乗り越えてきたという。

**学長杯を受賞して**

2021年度関西学生バスケットボール2部リーグ戦に優勝および1部リーグへの昇格へ貢献し、最優秀賞選手にも輝いた加藤さん。「昨年度まで体育会の幹部に所属しており、学長杯選考会にも立ち合うことが許されました。どの先輩方も素晴らしい成績をおさめられた方ばかりで、今年度に学長杯を受賞できたことを嬉しく思います。」と、語った。

先にお伝えしたように、関西学生バスケットボール2部リーグの最優秀賞選手賞も受賞した加藤さん。練習ではシュート・パス・ドリブルなどのすべてのプレーにおいて正確に確実に、実戦をイメージして取り組んできた。また後輩たちにもバスケットボールに対するチームとしての考え方や戦術など、大切なことがうまく伝わってほしいと語った。

**最優秀賞選手賞の受賞について**

「男子バスケットボール部の後輩達は1部リーグでも思う存分活躍して、期待以上の結果を残してくれたことと思います。チームには全体的に1人1人のできることを率先して行動する素晴らしい選手がたくさんいます。最高の結果を新シーズンでも残して欲しいと思うので、記事をご覧の皆さんもぜひ大教バスケットボール部の応援をよろしくお願いします！」

## 学長杯個人賞 男子バスケットボール部 4回生 加藤丈寛選手



シュートを放つ加藤選手(今年度関西学生バスケットボールリーグ2部の試合にて)

という目標を掲げ、チーム一丸となり奮闘してきた。どんなに過酷な練習であっても、チーム全員で耐えて乗り越えた結果、目標を達成したことでこれまでの努力が報われたと話す。

**コロナ禍での活動制限中では**

今年もコロナの影響で活動が制限されることもあったが、その渦中でも加藤さんは大会に向けてのモチベーション維持をしていたという。普段からフィジカルトレーニングを行い、NBAやプロ選手の動画を観ることで、日々の活力を得ていた。さらにバスケットボールにおける総合的な知識を

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

# 大教スポーツ

令和4年3月23日(水) 10号

発行 大阪教育大学体育会  
編集長 林洋輔(保健体育部門講師)  
編集員 電(小中国語コース3回生・卓球部)/小柳秀大(中等社会コース3回生・合気道部)/北辰翔太(中等社会コース3回生・山岳部)/宿坊祐太(小中国語コース3回生・準硬式野球部)/松田拓和(数理情報コース3回生・スキー部)/谷浦雄大(小中国語コース3回生・男子ラクロス部)/井上華社(小中国語コース2回生・準硬式野球部)/末高優菜(小中国語コース2回生・卓球部)/安井駿(教育心理コース2回生・男子ラクロス部)

2面 令和3年度体育会学長杯 受賞者・団体一覧/令和3年度 主な成績・活動一覧  
3面 大阪教育大学体育会組織紹介/部活動紹介(準硬式野球部・女子バスケットボール部)  
4面 我が体育会(第10回)東京五輪2020女子ハンドボール代表・板野陽選手・堀川真奈選手インタビュー/安井義和名誉教授インタビュー/編集後記







# 大教OG・東京五輪ハンドボール代表選手インタビュー 我が体育会 第10回



インタビューに答える板野選手(左)、堀川選手(右)

## 我が体育会 第10回

「温故知新」をテーマに本学体育会とゆかりの深い先輩方にインタビューする本企画。  
記念すべき第10回となる今回は、なんと2本立て!!東京オリンピック2020に女子ハンドボール代表として出場された板野選手、そして堀川真奈選手(共にイズミメイプルレッズ所属)、さらには大教体育会を永年指導してこられた大教大名譽教授の安井義和先生にたっぷりとお話をお伺いすることができました!

**Q1** 東京2020オリンピックを振り返って、得られた経験やこの大会にかけた特別な思いについてお聞かせください。  
**板野選手** 2019年の11月末に怪我をしてしまって、オリンピックが2020年8月に開催されていた間に合わなかったはずでした。延期が決まってから、ずっと怪我と向き合いながら五輪を迎えました。自分にとって競技人生初の怪我であり、競技活動から離れたのも初めての経験で、その間は代表チームで活動することもできませんでした。競技が出来なかった時の思いを含めてオリンピックにかける思いは一層強くなりました。

**堀川選手** 初めは代表チームから外れて帯同のみでしたが、途中で他の選手が怪我をして交代での日本代表入りでした。それでも、(帯同の間は)いつ出場となるかもしれないように気持ちを準備していたので、メンバー交代により選手となったときは緊張やこれまでに経験したことのないプレッシャーはありましたが、予め準備していたことをオリンピックで発揮することができました。  
**日本代表としての活動を長年経験していたので、オリンピックにかける思いや、出場したいという特別な思いは人一倍強いものがありました。他の沢山の選手も「オリンピックに「出たい」という強い思いをもっているなかで、自分が出場できたことは感謝の気持ちでいっぱいですし、幸でした。**

**Q2** 板野選手、堀川選手にとってハンドボールという競技の魅力とはどういったものでしょうか。  
**板野選手** ゴールキーパーである私の視点から言えば、攻の授業をとっても興味深く学びました。サッカーのことを教えてもらったり、ハンドボールを教えたりしていただき、勉強もみんなで支え合いながら頑張っていました。  
**堀川選手** 私もスポーツ専攻に所属していましたが、専攻の授業をとっても興味深く学びました。

**Q3** 大阪教育大学での学生生活に関する思い出を教えてください。  
**板野選手** 当時私はスポーツ専攻に所属していましたが、それ以外のスポーツに関する学科と合わせた三つの学科(保健体育専攻小学校コース、同中学校コース、教養学科スポーツ専攻)を「体研」と呼んでいました。体研と一緒に授業を受けることが多くとても仲が良かったので、お互いの部活の試合まで見に行っていました。遠くで開催された試合でも、大教大の当時のユニフォームカラーである青い色の服を身に着けて応援に来てくれました。  
**堀川選手** 私もスポーツ専攻に所属していましたが、専攻の授業をとっても興味深く学びました。

**Q4** 大阪教育大学の学生に伝えたいこと  
**板野選手** ハンドボールやスポーツに限らず、地道な努力は必ず大きく大切なことだと思っています。ハンドボールを始めるとき、そして大教大に入学した当時はオリンピックの代表選手として出場できると思ってもみませんでした。が、努力を続けていけば、運も味方についてくるものです。そして自分が打ち込んでいることを楽しむことも大切だと思います。地道に努力することの大切さを競技活動によって学んだと考えているので、学生の皆さんも自分を信じて頑張ってください!

**Q1** 東京2020オリンピックを振り返って、得られた経験やこの大会にかけた特別な思いについてお聞かせください。  
**板野選手** 2019年の11月末に怪我をしてしまって、オリンピックが2020年8月に開催されていた間に合わなかったはずでした。延期が決まってから、ずっと怪我と向き合いながら五輪を迎えました。自分にとって競技人生初の怪我であり、競技活動から離れたのも初めての経験で、その間は代表チームで活動することもできませんでした。競技が出来なかった時の思いを含めてオリンピックにかける思いは一層強くなりました。

**堀川選手** 初めは代表チームから外れて帯同のみでしたが、途中で他の選手が怪我をして交代での日本代表入りでした。それでも、(帯同の間は)いつ出場となるかもしれないように気持ちを準備していたので、メンバー交代により選手となったときは緊張やこれまでに経験したことのないプレッシャーはありましたが、予め準備していたことをオリンピックで発揮することができました。  
**日本代表としての活動を長年経験していたので、オリンピックにかける思いや、出場したいという特別な思いは人一倍強いものがありました。他の沢山の選手も「オリンピックに「出たい」という強い思いをもっているなかで、自分が出場できたことは感謝の気持ちでいっぱいですし、幸でした。**

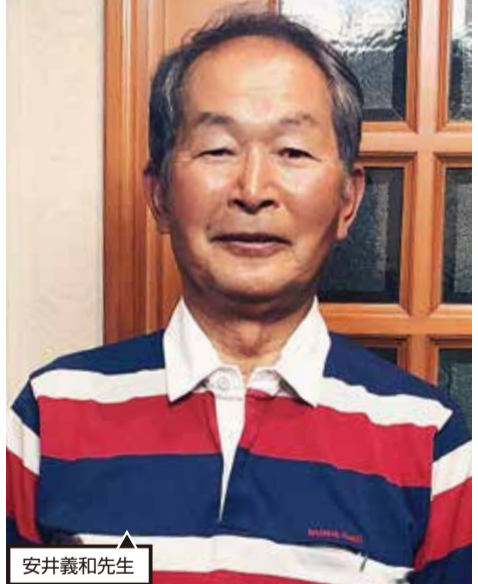
**Q2** 板野選手、堀川選手にとってハンドボールという競技の魅力とはどういったものでしょうか。  
**板野選手** ゴールキーパーである私の視点から言えば、攻の授業をとっても興味深く学びました。

**Q3** 大阪教育大学での学生生活に関する思い出を教えてください。  
**板野選手** 当時私はスポーツ専攻に所属していましたが、それ以外のスポーツに関する学科と合わせた三つの学科(保健体育専攻小学校コース、同中学校コース、教養学科スポーツ専攻)を「体研」と呼んでいました。体研と一緒に授業を受けることが多くとても仲が良かったので、お互いの部活の試合まで見に行っていました。遠くで開催された試合でも、大教大の当時のユニフォームカラーである青い色の服を身に着けて応援に来てくれました。  
**堀川選手** 私もスポーツ専攻に所属していましたが、専攻の授業をとっても興味深く学びました。

**Q4** 大阪教育大学の学生に伝えたいこと  
**板野選手** ハンドボールやスポーツに限らず、地道な努力は必ず大きく大切なことだと思っています。ハンドボールを始めるとき、そして大教大に入学した当時はオリンピックの代表選手として出場できると思ってもみませんでした。が、努力を続けていけば、運も味方についてくるものです。そして自分が打ち込んでいることを楽しむことも大切だと思います。地道に努力することの大切さを競技活動によって学んだと考えているので、学生の皆さんも自分を信じて頑張ってください!

**安井義和先生略歴**  
昭和17年12月25日生まれ。  
大阪教育大学教授、付属天王寺小学校校長、附属学校部長、畿央大学現代学科学科長などを歴任。現在大阪教育大学 畿央大学名誉教授。  
昭和53年から平成20年まで本学体育会顧問。

## 安井義和先生 (大阪教育大学名誉教授) インタビュー



安井義和先生

**顧問教員の役割とは**  
本学体育会の顧問を務め、そのほとんどの期間に山岳部・スキー部の顧問も兼任された安井先生。大学の部活動における顧問教員の果たすべき役割について、ご自身の経験と共に語っていただきました。  
「顧問は「来んもん」「来ないもん」と言われることもありまして。ですが、単に印鑑を押すだけの顧問の役割ではありません。部員に何かあった時には対社会的に向き合わなければなりませんし、部員を見守る立場として「顧問はどう動いたら良いのか」と考えて来たこと、これが部活動の顧問を引き受けることで私が得た大きな教訓です。」



1980年代当時、大教大学生課主催のスキー講習における安井先生(白馬五電スキー場にて)

**一人の保護者として**  
安井先生のご子息も本学以外の大学で体育会に所属し、剣道に取り組んでおられたという。その真摯な取り組みから、「私も学生から勉強させてもらったと思っています。」

と安井先生は語る。「普段の姿を知っている息子だからなのかもしれませんが、息子が部活に取り組む姿を見たとき、学生を見る目が一変しました。自分の知らないところで学生が部活動に打ち込む真剣な姿に深い感銘を覚えたからです。学生が自分の居場所を頑張っている姿には、大人も感動させられるものです。」また、スポーツ推薦枠で大教大に入学して部活動に取り組みする学生についても、先生はある思い出を語っていただきました。「スポーツ推薦で入学した学生にはプレッシャーのしかかります。ある推薦入学生が、『スポーツで大教大に入ったのだから、一般生には負けない』と語っていたのを覚えています。学生が

心に思いを抱きつつ、人に知られない陰で頑張っている姿は印象的なものでした。」  
**大教大体育会との関わりを通して大教生に伝えてきたもの**  
大教体育会には全国大会の常連といったような強豪クラブもあれば、一般入学生を中心として強豪校に挑戦していることとする部活もある。安井先生は、顧問をご担当されたスキー部が学外の大会で思うような結果を残せない時にも学生の活動意欲を高める取り組みをされていたという。「顧問杯」というカップを作り、表彰を行っていました。部活動が目標通りの結果を残せなかった時にも、部活の中から毎年1名選んで私からレプリカを授与する表彰をしていました。皆、それを励みに一生懸命取り組んでくれたというに思います。」

**取材を終えて**  
終始なごやかな雰囲気の中で貴重なお話を聞かせてくださった安井先生。語られる話には永年にわたり大教体育会を見守ってこられた厳しくも暖かい眼差しが感じられました。体育会の歴史を引き継ぐ立場として自覚を新たにするとともに、ご高配いただいた安井先生にこの場をお借りして改めて厚く御礼を申し上げます。

先達にお話しを伺うことで本学体育会の今昔をお伝えしてきた大教スポーツ。今号では永年にわたり大教体育会の指導的立場としてご参画されてきた本学名誉教授の安井義和先生にお話しを伺う機会をいただいた。

今号の大教スポーツの編集を担当いたしました、広報部長の藤です。第10号という節目を迎えた本号では、体育会の特集に加え、毎年恒例となっている「我が体育会」のコーナーを「増量」して掲載いたしました。本学体育会の今はもちろん、中々知り得ないかつての姿を知ることができる、まさに「温故知新」という言葉がふさわしい記事となっています。記事の作成に当たっては、

一つでも多くの部活動を紹介したいという気持ちとの闘いでした。この記事を通して紹介されている部活動のみならず、それ以外の団体も含めて体育会という組織、またそこに所属する個人に対して興味を深めていただくと幸いです。

本号につきましても、保健体育部門講師である林洋輔先生には心理面・技術面ともに沢山の指導を頂きました。心よりお礼申し上げます。最後にはなりますが、今号の編集、取材等、作成にご協力いただきました全ての方々にこの場をお借りして心よりの感謝を申し上げ、私の編集後記といたします。

小中教育専攻 国語教育コース 3年生 藤

**編集 後記**